結草
kusamusubi
No.24

Publishing house:2-19-32Moriyama Kanazawa
JodoShinsyu Jhokoji Phone&Fax076-252-4922
www.jhokoji.net/　info@jhokoji.net　2018.02.01

聖徳皇のめぐみにて

鈴木大拙館館長　木村　宣彰

木村でございます。皆さんよくお参りくださいました。お彼岸のお中日にこうして浄光寺さんのお太子さんのご縁にあわせていただいて本当にありがとうございます。今年は十五年目のご縁となるわけですが、いつも申し上げるのですけれども、こうして法要とか聴聞というのは心構えがとても大切です。ある人からこのように教えていただきました。今日の聴聞は今生で初めての聴聞だと思いなさい。今日の法要はわたくし一人のための法要だと思いなさい。今日の聴聞は今生で最後の聴聞だと思いなさい。そういう気持ちで聞いて下さいと教えられ、なるほどなと思いましたね。私も十五年ご縁を頂戴しておるわけですけれども、今生で最初だという気持ちを忘れてはいけない。何事も初ごとだという気持ちで聞かないといけませんし、もしこれが今生で最後のご縁だなと思うと、これどうでしょうね、万感胸に迫るようなものがあるのではないでしょうかね。そういう気持ちで日暮らしができたらこれはとても今日の天気のように輝いて日暮らしができる。あれも困った、これも困ったとなにか暗い気持ちでなくて、今言ったような気持ちが持てたらとても尊いのではないかと私は思っております。

彼岸と此岸

今日はお彼岸でしょう。お彼岸のお中日、お彼岸というのは元々これインドの言葉があって、中国あって、ずっと三国を伝来してきた謂れがあるわけです。インドではお彼岸のことを波羅蜜（はらみつ）、波羅蜜多（はらみった）といいます。インドの言葉で聞いても私たち分かりませんよね。でもお釈迦さまはお彼岸のことを波羅蜜、あるいは波羅蜜多、パーラミタとおっしゃった。パーラというのは完全な、ミタというのはその世界へ至るという意味です。波羅蜜あるいは波羅蜜多という言葉を鳩摩羅什（くまらじゅ）という三蔵法師が翻訳してくださって、これを至彼岸（とうひがん）と翻訳していただいたのですよ。これを中国で、鳩摩羅什どなの三蔵が波羅蜜とは、完全な、最高に素晴らしい世界に至ると訳され、これを日本では「至」を省略して彼岸とこういっておる。

彼岸には反対の言葉があって、これは此岸（しがん）という。私たちが生活して居る処はこちらの此岸ですよ。それに対して向う岸がありますよということを教えてくださるのが彼の岸ですから、川を挟んで、あるいは海を挟んで向う側です。もしね、向う岸がある、彼岸があると気がつかなかったら私たちが此岸、この岸にいるということも気がつかないのですよ。向う岸があるから、こちらの岸の生活はこうだなということが分かるわけですよ。

井の中の蛙大海を知らずという諺がありますよね。井戸の中にいるカエルは広いぞと思っていてもその中だけです。外にはもっと広い世界の海原があると思ったら、井戸の中の生活はなんて小さいものかと気がつきますよ。もし出なかったら気がつかない。また、鳥なき里の蝙蝠（こうもり）という言葉もありますよね。コウモリは空を飛べるのは私だけだと思うけど、鳥に会ったら、私はコウモリなんだと気づく。

彼岸、私たちを超えた世界がありますよ。本当の意味は、最高の、

最も優れた、この上ない、そういう完成された世界。私たちは何か色々やっておるけれども、もうちょっと何かせんといかんというのはいっぱいありますよね。もう出来上がった、理想の世界だというのが波羅蜜。パーラミタ。私たちはそういう世界を思い浮かべることによって、自分の世界がいかに不十分なものかということを気づかさせていただく。それを分かりやすい言葉で言えば、井の中の蛙大海を知らず、それはまさしく波羅蜜のことをいっている。それに気づいて私は井の中にいるんだなということに気づかさせていただく。

そして、今日はお中日でお太子さんの法要が勤まる。どうしてお中日なのかといったら、浄土三部経の中に『観無量寿経』というお経があります。その中に韋提希という女性が、息子は言う事をきかんし、娑婆にいたら色々あって大変だ。最高に完全な世界に私は行きたい、あるいはそれを思い浮かべたいと言った時にお釈迦さまはどうおっしゃっていただいたかというと、今日はお彼岸の中日だから太陽は真東から出て、真西に沈む。だからどうぞその西に沈む太陽を見て下さいと。目を開けていても、目を瞑ってみても見えるようにしてください。そういうことが観無量寿経に書いてあるんです。そうしたら善導大師が、今日は尊い日だから完全なる世界、お浄土の世界を思い浮かべるには一番いい日だということをお示しいただいて、それからずっと今までこういうお彼岸が続いておるのですよ。インドではそういう理想の世界をパーラ、完全な理想の世界を向うの岸に至るとこういう。それを私たちは、お彼岸といっている。でもその日だけではない。いつもそういうことを思い浮かべないといけませんね。今日だけで明日から忘れたということだと、これは寂しいことですね。そういうことをいつも思い浮かべる。ですから観無量寿経には「閉目開目」と書いてある。目を開いてみたら真西に太陽が沈んでいくなということが見える。でも閉目、目を瞑っても見える。これは素晴らしいことではないでしょうか。そうならないとやっぱり駄目なんじゃないかなと思うんですね。私たちの日常の生活、此の世界、それに対して完全な世界、彼岸がありますよと。

聖徳太子のお言葉

聖徳太子、お太子さん、こちらには十七歳の御像が出ておりますけれども、いろんな言葉が残っておりますね。大体三つぐらい。聖徳太子が病気になられて見舞いに行った。そしたら聖徳太子がどうおっしゃったか。お金はね、すぐに無くなるよ。でも仏法は無くなりませんよと、こうおっしゃった。財物は滅びる。でも仏法は絶対に滅びませんよ。息子さんがそれを書き記して大安寺というお寺の銅板に彫り込んであるんですよ。お太子さんからこういうことを聞きましたと。お金があっても無くなるけれども、仏法は無くなりませんよ。これは永遠のものですよとおっしゃった。その聖徳太子をお札の肖像に描いてありましたね。あれは大蔵省か財務省か、聖徳太子のお言葉を知って描いたのかなといつも思う。あのお札のところに財物は滅びますが、仏法は滅びませんよと書いてあるとお金に対する見方がちょっと変わってくるなと私は思うのですけどね。その息子さんはそのことは大事だと、紙に書いたら無くなるかもしれないから銅板に彫って残した。

もう一人の息子さん、山背大兄王、ご長男です。ご長男へはどう言ったか。悪いことはするな、良いことをしなさいと。「諸悪莫作　衆善奉行」。心を綺麗にせんといかん。これをまた山背大兄王が書き残してくれた。

もうひとつ、これは奥さん、お后さまへの言葉。これは皆さんもよくご存じのとおり、「世間虚仮唯仏是真」。この言葉はよく知られておるけれども、ちょっと誤解されているかもしれない。世間は虚しいもので仮のものですよ。仏法の世界は真ですよとこういっておる。私たちは、そういう言葉を聞くとどう思うかといったら、ああ娑婆は駄目だな、仏さんの世界に行かんなんなと、こういう風に思うでしょう。そしたらこの娑婆で生きておれなくなりますよね。聖徳太子は摂政として推古天皇に代わって政治をなさっておられた。それではそんな世間虚仮のところで政治をなさっておったらどうするのでしょう。一方で仏法の手を合わせて、そしてお経の解釈をなさったり、十七条の憲法をお作りになったりしておる。これどうするんだということになります。

大事なことは世間虚仮というのはこういう風に物事を見るんですよ、仏法の世界ではこういうことを教えているんですよとこういっているんですよ。この二つを、こっちが善い悪いというと話がややこしくなるんですよ。世間というものはどういうものか。みんな二つに分けて物事を考える。分かりやすいのは、損か得かでしょう、楽か苦かでしょう。究極は二つに分けた考え方の象徴的なものは生死ですよ。生きているか死ぬか、これを二つに分けているわけですよ。皆さん、今お元気でにこやかにいらっしゃる。でもやがて死ぬかもしれない。いや必ず死ぬんですけれども。これだけは間違いない。生と死と二つに分けて考えている。こちらは良いな、こちらはいらんなとこう考えるわけですよ。今日、私は車で来ましたけれどもね。歩いてくるとちょっと苦しいな、それで車で来るわけですよ。必ず何か二者択一の選択をしておりますよ。苦か楽か。損か得か。善いか悪いか。そういう風に二つに分ける究極のものが生死です。

生死いづべき道

ですから親鸞聖人も悩まれたんですよ。比叡山で修行なさったけれども、これで善いのか悪いのか。いつ悟りが開けるのか開けないのか。死んだらどうなるんだ。親鸞聖人の奥様は書いておられる「生死いづべき道」と。生死いづべき道というのは、そういうものを超えた世界。その世界とは彼岸の世界。この彼岸の世界はどうかと二つに分ける。二つに分けることを私たちは分別とこういっているんでしょう。ゴミを燃えるゴミと燃えないゴミに分けること、これは大事なことですよ。苦か楽か。これを二つに分けると、これが楽やなと思っても他所にもっと楽があったら、なんだこれはとなる。どこまで行ってもとめどなく迷い続けなくてはならない。これを迷いという。生死の迷いといったら生き死にの迷いではない。要するに物事を二つに分けて、必ずどっちが良いかとなる。仮にこれが良いとしても、他所を見たら必ず上があるわけですよ。そしたらまた駄目だ、昨日まで良かったのに満足できない。そして腹が立つ。

そういう気持ちを仏教ではどういっているかといったら、貪欲と瞋恚というわけですよ。貪欲とはもっと欲しい、もっと良いものが欲しい。瞋恚は要らんものはあっちいけ、あっちいけという。三毒の煩悩。貪りと怒り、そして愚痴。そういう風に分けるのを愚痴というんですよ。物事を正しく見ることができないというのが愚痴。難しい言葉で貪欲だ瞋恚だ愚痴だといくらでも辞書や本にでも書いてあるけれども、要するに好きな物はもっとちょうだい、嫌いなものはもういりません、そういうふうに分けるのを愚痴といいます。それが貪欲・瞋恚・愚痴という三つの煩悩。それがこの此岸、私たちの世界だ。

彼岸はどうか。そういうものは二つに分けられないんですよと。生死は不二だと。分けられるなら分けますよ。死はいらない。あっちいってちょうだいというかもしれませんが、生まれた時から生死は二つ一緒なんですよ。でも都合の良い所で分けるのが凡夫というものであり、煩悩です。その気持ちが私たちを迷わせているわけですよ。それも止めどなく迷うんですよ。仮に満足してもまたちょっとしたらまた次の物がでてきて、毎日毎日、それが生死を繰

り返す。生死といったら生き死にではなく、物事を二つに分けて考える。片方を取り、片方を捨てようとするその気持ちが、娑婆の一番の根本なんです。

親鸞聖人も若くして比叡山に行かれたけれども、そういう悩みがあったわけですよ。それを後で奥さんに語っておられる。生死を超える道が問題であったと。生死といったら死ぬのが嫌だなといった気持ちが起こる、それも入りますよ。でも問題は日常生活の中でみんな二つに分けて考えているということです。あなたも良い、あの人も良いと言っていけたらもっと楽に生活できるはずですよ。そういうふうな生き方ができない。反対にそういうふうな生き方ができるのが真だとこういっておるんですよ。だから仏の世界とは二つに分けない。不二。二つでありながら一つなんですよというふうに見ることができるのが仏の世界ですよ。

この間、小学校四年生の詩にこう書いてあった。「みんなで遊んでいる時、運動場は狭い狭い。先生から石を拾って掃除をしなさいと言われたら、運動場は広い広い。」遊んでいる時は狭い狭い、もっと広い運動場があるのに、うちの運動場はなんと狭いと愚痴ったわけですよ。でも今度はみんなで石を拾って草をむしって綺麗にしましょうと言ったら運動場は広い広いとこうなる。でも運動場は広くなったり狭くなったりしますか。掃除する瞬間に運動場がバババッと広くなっていった。遊ぶ時にドドドッと狭くなったというのであれば、狭い狭い、広い広いとこう愚痴るかもしれません。でも運動場は一つですよ。狭いとか広いとか言っておるけれども運動場は一つですよ。一つのものを二つに分けているわけですよ。そうするとより広い運動場があるじゃないか。こんな広いところは嫌だとこうなってくる。迷いや悩みが起こってくる。これをひとことで言うと先ほど言った三毒ですよ。狭いな、もっと広い方が良いなというのが貪欲。掃除するのは嫌だな、これは瞋恚。一つの運動場なのに見方によって変わっていることに気づかない。みんな自分の都合によって分けている。物事を正しく見る事をできない、それを愚痴という。彼岸の世界は二つに分けて見ない。正しく物事を見る。これが真。だから聖徳太子はこの娑婆を捨ててどっかへ行きなさいとおっしゃっているのではないですよ。この娑婆は、世間の眼鏡で二つに分けてしまう世界。仏の眼で見ると、そうではなくて一つ。

今。今しかないんですよ。今、今日幸せに生きていることが尊いんだけれども、もっと先に良いものがあるかもしれないと思う。今、浄光寺さんのここにあるんですよ、尊いことが。それなのにどこか他所にもっと良いことがあるかもしれない。あるいはお聴聞したら何か良いご利益があるんじゃないかとこう考えるんですよ。そうすると、もっと良いご利益があそこにはある。もっと良いご利益があそこにもあるとまた悩み始めるわけですよ。

「今」、「茲（ここ）」、「只（ただ）」。ここに尊い世界があるということを聖徳太子は教えている。それを唯仏是真、仏さまの眼から見たらそういう風に見えますよということです。娑婆の損得の眼で見ると二つに分かれて、ますます悩みが多くなりますよ。運動場の話で私は小学校四年生に教えられた。運動の時は狭い狭い、掃除の時は広い広い。これが娑婆に生きているものの見方。でも仮にその子が仏さんの眼で見たら狭いも広いもない。運動場はひとつ。私はこの運動場で掃除させていただく。運動場で野球をさせていただく。喜べる、感謝ができるかということだと私は思う。そのことをある人は「今よりなきに、茲にぞ あるに、只こそ よきに」（柳宗悦「心偈」より）只では満足できんのですよ。ただ生きているだけでは。もっとハッピーに生きようと、幸いを求めていこうとする。今よりなきに、ここ、浄光寺さんのここ、ここにぞある。今、ここ、ただ。ところがただとは思えないで、必ずそう考える。

ひいおばあちゃんの言葉

この間ね、去年お話ししたことをわざわざ大拙館に住職さんが届けてくださったんですよ。それを見て、

金沢市の高田俊彦さんのおばあちゃんの話をさせていただいたことを思い出しました。それを読んだ時に感動したんですよ。あっ、こんな生き方をなさっている方がいるんだなあと。感動したことを自分だけのものにしてはいけない。みんなで共に喜んで共感しないと。

このお話は昭和二十八年四月の話です。高田俊彦さんのひいおばあちゃんの話です。「今日、私はお浄土に参らせてもらうよ」とおっしゃったんですよ、夜の十時に。そしてみんなに「ありがとう」と言って十二時前に亡くなったんですよ、お念仏を称えながら。私だったら病院で測ってもらわないと分からないかもしれないけど、このおばあちゃんは自分で分かった。隣の部屋で寝ておった高校二年生のひ孫に「今日私浄土に参らせてもらうよ」と。そしてみんなにお礼を言った。さらに往生するということは特別なことではないのですよと、その子供に語ったというのです。そしてそのひ孫のお母さんを呼んで「あんたにはずいぶん世話になった」と。手を握って「ありがとう、ありがとう、ありがとう」と感謝された。その後、お父さんが出てきて、みんなでお念仏を称えた。なまんだぶ、なまんだぶと。そのうちおばあちゃんのお念仏の声が途絶えた。おばあちゃんお浄土へ往生されたですよ。それでお仏壇でみんなでお勤めをした。

礼を言うて、お念仏をして、往生された。その後みんなでお勤めをした。私はこの文章に接したときに非常に感動した。これを浄光寺の皆さんにお聞きいただきたいと思って去年お話しさせていただいたようです。ところがその後、自分の部屋を片付けていると、古い本が出てきたんですよ。その本に高田俊彦さんの別の文章が書いていたんですよ。

宮田東和

高田俊彦さんが七十六歳の時のことです。先ほどは、六十二歳の頃のお話しだった。あれから十五年ほどを経て、今度はお母さんのことが書いてある。ひいおばあちゃんと同じようにお母さんの方もまたお礼を言うわけです。

お母さんの言葉

ちょっと読んでみますとね。「平成八年三月十六日、母やよがリウマチによる多臓器不全のため亡くなった。享年八十一歳だった。数年前から関節の変形で歩行ができなくなって入院していた。週の半ばと週末には、母を見に行くことが習慣になっていた。」子供達と病院へ見舞いに行ったというんですね。老衰も加わりモルヒネと輸血もそろそろ限界にきた。そういうふうに限界がきたと言われて半年たって三月十四日、職場に病院から危篤の知らせが入った。見舞いに行ったらお母さんがどう言ったか。ありがとうではなく、また来たか。

「また来たか、もう来るなと言うておいたがに。おらの年取った妹たちも来たし、お前ら子供も、また来てくれた。何度も危篤や、それ臨終やと、県堺を越えて氷見の病院まで駆け付けてくれて、生きている者の方がおらよりも大変やなあ。」そのお母さんがおっしゃったというんですよ。私だったらよう来てくれたと礼を言うと思うけれども、このお母さんは生きている者の方が大変だなと。なぜそのようなことをおっしゃったかというと、「前から話をしておいたとおり、臨終やからと騒ぐことはないぞ。」先のひいおばあちゃんと同じことをおっしゃっているわけですよ。続けて「平生業成（へいぜいごうじょう）やぞ、お文さまにあるやろ。おらはもうお念仏のおかげで正定聚（しょうじょうじゅ）や。だからして、臨終に良いも悪いもない。ひとの臨終をとやかく言うもんでないぞ。」すごいことをおっしゃっている。「おらの臨終は阿弥陀さまにまかせたがや。さあ早う家へ帰って休んでくれ、運転には気をつけてな。なむあみだ、なむあみだ・・・・母はこう言い終えると念仏を称えながら

目を閉じた。」そう言われたからといってもお見舞いに行きますよね。お母さんは休んでおって、「俊、お前、まだおったがか。あ、この前、会いたい者がおったら呼ぼうかと言うてくれたが、それはいらぬぞ。会う縁にある者にはもう会えた。俱会一処と言うぞ。」俱会一処、必ず浄土で一緒になるんやぞと。このお母さんは生と死を分けとらんのですよ。どうしたらこんな気持ちになれるか、大変な問題なんだけれども、恐らくひいおばあちゃんの姿を見ながらそうなったんでしょうね。「これは大事なことやが、お念仏や。お念仏は人それぞれが戴くもの、無理せんでいい。お前もご縁はいただいているのやからな。念仏がひとりでに湧いてきて、それに押されて親さまの懐にとぼしこむ（金沢弁でつきすすむの意）、そんな心になるものや。おらは、そうして阿弥陀さまにすっかりまかせてしもうたがや。」帰れというもんだから帰った。「母の言に従い十四目の深夜に病院を出た。十六日の朝、病院にいた妹から、六時三十九分に往ったのと電話があった。母の念仏を耳にしながら、所用で妹が枕辺を離れた間のことであったと。母の臨終には誰も立会っていない。」お母さんがひとりで往生なさったと書いてある。死を恐れている様子などひとつもないですわね。

平生業成

ここに正定聚やとこうお母さんが言っておる。親鸞聖人の時代の前はどうであったか。臨終が一番の問題だったんですよ。臨終に「わあー怖い」とか言うておったら往生できません。だから臨終に気持ちを整えて、乱れないでお念仏を称えて、往生すれば浄土へ行きますよと往生伝を読むとみんなそう書いてある。でもね、凡夫がそんな風に果たしてできますか。平家物語を読んでも、侍たちが敵につかまるでしょう、そして切られそうになる。そうしたら暫し待てと言うんですよ。お念仏を称えさせてくれと。乃至十念、十回のお念仏を称えるから、なまんだぶつ、なまんだぶつ・・・十回称える、さぁ切ってくれと。そういう気持ちでなければ浄土に往生できない。でも私たちの娑婆ではそんな気持ちで往生できるかどうか分かりません。だから親鸞聖人は、そうではなくて平生業成やと。この現生の中で正定聚を得なければならないとおっしゃっている。正定聚とは信心を得るということですわね。信心を得て信心がぶれないのを安心といういうわけですよ。親鸞聖人の前はどう言ったか。臨終の一念、それは平生のお念仏の百年お念仏を称えるより大事だとこう申していた。でも臨終の時に心が乱れていては駄目ですよ。それにひきかえ、現生に往生が間違いない、それが正定聚。信心が決定する。決定、ぶれなくなる、これが安心。往生が約束される。普段の日に信心をいただかなければいけない。

聖徳皇のめぐみにて

親鸞聖人や法然上人がこの正定聚ということをおっしゃったわけですけれども、親鸞聖人が八十五歳を過ぎてからお書きになったご和讃にこう書いてある。「仏智不思議の誓願を　聖徳皇のめぐみにて　正定聚に帰入して　補処の弥勒のごとくなり」。聖徳皇の恵にて私たちは正定聚に入ることができる。さきほどのお母さんは、私はもう正定聚だ。何の生死の心配はないんだ。だから見舞いに来ても来なくても大丈夫とおっしゃった。補処の弥勒とは五十六億七千万年経ったら仏さんになるとご和讃に書いてありますね。次に仏さんになると決まった菩薩さまを弥勒というんですよ。この弥勒さまが悟りを開くまで五十六億七千万年ですよ。でもその前はもっと長い。三大阿僧祇劫。劫とは数えきれないような長い時間です。その数えきれない時間の無数賠を阿僧祇劫というんです。それを三倍したものが三大阿僧祇劫。その長い時間を経て、そしてようやく弥勒菩薩は次の仏さんになれるところまで到達した。そしてさらに五十六億七千万年経って仏さんになるというんですよ。親鸞聖人はお念仏によってその弥勒さんと同じ位に到達していると。なぜ到達できるのか。それは聖徳皇の恵にてだとおっしゃっている。

こういうご和讃もありますよ。「聖

徳皇あわれみて　仏智不思議の誓願に　すすめいれしめたまいてぞ　住正定聚の身となれる」。正像末和讃の中にそう書いてある。聖徳太子さまのご縁によってお念仏に合わせていただいたことを感謝なさっておられるのですよ。私たちは親鸞聖人が法然上人に出会ってお念仏の道に入られたと聞いておりますわね。でもその前に言い伝えがあってね、親鸞聖人は九歳で比叡山に入られたでしょう。親鸞聖人がお生まれになった時代、これは大変な時代だった。その時、京都は大干ばつ。その翌年は長雨によってまた被害が出た。親鸞聖人が四歳の時も干ばつで死者が多数。さらに五歳の時に大きな火事があった。その様子は方丈記の中に書いてありますよ。その翌年また火事が起こった。さらにその翌年、親鸞聖人が七歳の時、大風が吹いた、洪水、地震が起こった。この時また沢山の人が亡くなった。八歳、平家と源氏とけんかしておるから、お寺が焼かれたり、四月に竜巻が起こった。

そして親鸞聖人、九歳の春に出家なさるでしょう。二年間飢饉が続いで何も食べるものがなくなった。四月、五月の二か月、京都の左京だけで四万二千三百人の人が亡くなった。亡くなったけど始末できないから道に放置されていた。弔う事も出来ない。火葬することもできない。そんな時に出家をなさった。「明日ありと　思う心の仇桜　夜半に嵐の吹かぬものかは」。養和元年に親鸞聖人が得度された。

なんとかせんといかん。せめて年号を変えたらいいんじゃないかと考えた。それで養和の年号の後どうなったか。「寿永」、長生きするということでしょう。こういう年号に変えて少しでもみんなが健康で長生きできるように願っている。こういうふうに災害が起こったために年号を変えるのを災異改元というんですよ。親鸞聖人の九十年の生涯の中で全部で十六回そういうことがあった。まさしくずっと災害の中で生涯を送られた。災害の時にみんなに囲まれて先ほどののおばあちゃんのようにありがとうと言って往けたら良いんだろうけど、できないとどうするか。そうすると平生業成、そして現生で不退、生きている時に信心を獲得していく。親鸞聖人の奥様、恵信尼公が書いてある。法然上人のもとに行かれたのは、生死いづべき道を求めて、そういうものを超えていくためであったと。ところがその前に親鸞聖人の夢の事を書いたものが残っておるんですよ。三つの夢の記というものがある。

夢告

ひとつは真宗高田派の本山に残っている。その夢の事を書いた中に、十九歳の時のことが書いてある。養和元年に出家なさって、それから十年間経った。その間一生懸命、仏法の修行をなさったわけですよ。常行三昧堂の堂僧としてお勤めになっておった。十九歳の時、南都に行かれて磯長にある聖徳太子のお墓にお参りになったんですよ。推古二十九年の十二月に聖徳太子のお母さんが亡くなった。そして年が変わって二月十一日にお后さんが亡くなった。翌日の二十二日に太子が亡くなった。だからみんな同じお墓に入っている。

そこに親鸞聖人が十九歳の時にお参りされたと伝わっておる。そしてお籠りをされた。わたしたちは六角堂のお籠りのことはよく聞いておるけれども、磯長のご廟の時も参籠された。その時に聖徳太子からお告げがあった。「聖徳太子、善信に告ぐ、我が三尊は塵沙界を化す。日域は大乗相応の地なり。諦らかに聴け、諦らかに聴け、我が教令を。汝が命根は、まさに十余歳なるべし。命終わりて速やかに清浄土に入らん。善く信ぜよ、善く信ぜよ、真の菩薩を」。あなたの寿命はあと十年ですよ。二十九歳までですよとお告げがあった。でも死んだ後は浄土へ往生できますよ。どうですか。浄土に往けるから安心できますか。あと十年だから心配になる。なかなか難しい問題ではないですか。恐らく親鸞聖人は聖徳太子のお告げですからそれから十年間は一生懸命修行なさったと思いますよ、迷いがないように。

その後、正治二年、二十八歳の大晦日の時に今度は比叡山無動寺の大乗院に籠った。そしたら如意輪観音が「善いかな善いかな、汝が願い、将に満足せんとす。善いかな善いか

な、我が願い、亦満足す」とのお告げがあった。自分の善知識に本当に会いたいという願いを持って籠られたら如意輪観音さんのお告げがあって善いかな、善いかな、お前の願いは満足するぞ。あなたの先生、善知識に会えますよと、こういうお告げがあったというんですよ。

そして二十九歳、皆さんご存知のように六角堂に籠られるんですよね。御伝鈔（ごでんしょう）にでてきますが、「建仁三年歳辛酉四月五日夜寅の時　聖人夢想の告ましまし。彼の『記』にいわく、六角堂の救世菩薩、（中略）善信に告命してのたまわく」。百日籠った九十五日目が四月五日ということは、逆算すると元旦か大晦日に籠られたということでしょう。私たちは夢というとフロイトとか予夢とか潜在意識の欲望が現れてくるように思うけども、その時代の人達は夢は神や仏からのお告げだと信じて疑ってないと思いますね。現代人は目に見えるもの、音に聞こえるもの、そういうものだけを信じているわけですよ。でも親鸞聖人はおっしゃっていますよね、はっきり。歎異抄にもしばしばでてくるけれども「存知せず」、存知せずというのは頭で分ったというのが存知でしょう。もう一つは目にも見えないけれどもそれを信じる、それを信知という。

鈴木大拙は「霊性（れいせい）」ということを言った。みんな不可思議な神秘的なことを思うけれども、そういうことではない。暖房があるし、外も暖かいし、これ温かいなあと感じる世界はありますよ。感覚的な世界ですね。あるいは感性とか感情や知性もありますが、それだけではない。鈴木大拙は霊性という世界がありますよと。親鸞聖人の言葉で言えば存知ではなく信知の世界のような世界。そういうようなものに初めて気づいたのが法然上人や親鸞聖人だと『日本的霊性』の中に書いてある。我々は目で見て耳で聞いて、鼻で匂いをかいで、舌で味わって、これらは感覚でしょう。そして意識がある。もっと奥底の所に末那識（まなしき）とか阿頼耶識（あらやしき）という意識がありますよということを天親菩薩の時代からずっと言っているわけですよ。恐らく親鸞聖人もそういうものを感じて、夢のお告げをきちんと受け止めて、その通りに生きられたんだろうと私は思っているんですよ。それを大拙先生は霊性。大拙先生の尊いお仕事の一つはそういう世界のことをおっしゃっていただいたことだと私は思っておるんですね。

親鸞聖人も参籠する中で何かを感じ取るものがあった。そのことがあって法然上人に会って本願念仏の教えに会うことができたんではないですか。だからずっと遡れば和讃にありますように「聖徳皇のおあわれみに　護持つ養育たえずして　如来二種の回向に　いれしめおわします」。聖徳太子の哀れみによって弥陀の本願の教えによって私たちはお念仏に会うことができる。お念仏に会わなかったらどうなるのか。五十六億七千万年経っても成仏できるかどうかわからない。弥陀の本願だからこそ即得往生ができるのだとそういう教えに会わせていただいた、その感謝の気持ちをお彼岸に起こすことができれば大変尊いのではないかと思いますね。本日は長い時間お付き合いいただきましてありがとうございました。

《編集後記》

◇本文は平成二九年三月二十日、浄光寺「お太子さん」の法話録であります。洵（まこと）に勝手ながら紙片の都合上、割愛、編集させていただきました。

＊行事のご案内＊

・「お太子さん」

三月二十一日（彼岸中日）

午後一時～

法話　木村宣彰師

○年中行事

除夜の鐘	十二月三十一日	午後十一時半
修正会	一月一日	午前零時
お太子さん	三月二十一日	午後一時
盂蘭盆会	七月十三日～	午前六時～
追弔会	八月十三日	午前十時
報恩講	十月十七日 十八日	午後一時半・夜七時 午前十時半

◎お知らせ

◆三月二十八日より「きこまいけ」を再開いたします。毎月二十八日にみんなで正信偈を学んでいます。

◆バス旅行のご案内。四月一日（日）、みんなで東本願寺「春の法要」（音楽法要）に参拝します。お問い合わせ、お申し込みは浄光寺まで。皆さまのご参加をお待ちしております。